

『源氏物語』における裳着についての一考察

裳を着ける女と着せられる姫君

A Study of the Ceremony of “Mogi”, in *The Tale of Genji*

足立 雍子

ADACHI Yasuko

The ceremony of “Mogi” was one of the women’s rites of passage of Heian era (794–1185). To wear a “Mo” with a similar shape of skirt was to give wider publicity that a daughter grow up to be woman and ready to marry noble man. The “Mo” as ceremonial dress was not only bride’s outfit but also dignified manner for court ladies in that times.

This study offers the subject that the difference of the meaning between the ladies wearing the “Mo” by her father and the court ladies wearing the “Mo” of her own accord. And beside there were also noble ladies wearing the “Mo” by their decision of intelligences and wits in the status society.

はじめに

平安時代、宮廷での晴の装束は五衣唐衣裳であった。『源氏物語』においても様々な女性が晴の衣装を纏って登場する。女性の通過儀礼の一つである裳着の儀はこの晴の装束を身に着け、婚期が近いことを世に知らしめるものであった。又一方晴の装束は貴人の前に出るときに身に着ける衣装でもあり、女房装束でもあった。本稿では当時の状況を物語や日記から考察し、現在までの衣装についての解説説明等を体系的づけることを試みた。

晴の衣装には、着せられることと、また自ら着ることとの間には大きな格差が存在する。正礼装である裳を着けるという行為がどのような事象なのか。またどのような女性達の位置を表象しているのか。そして『源氏物語』の女性達のなかでも大きな位置を占める紫の上の裳着が書かれ

なかったのは何故か。登場する女性達の裳着の場面を通じ、また当時藤原時代の宮廷女性のあり方から、作者の意図を考察し、その試論を呈する。

尚、引用部分（ ）内は小学館日本古典文学全集 源氏物語 巻 頁を、又それ以外は小学館日本古典文学全集、新編日本古典文学全集の中の書名 頁を表記する。

1. 唐衣裳

唐衣は唐の御衣、唐装束とも言い、藤原時代よりの宮廷女子の正装である。「唐衣は裳がそふなり」と『岷江入楚』にあるように裳とともに着け、晴装束の最高衣である。唐衣は諸説あるが奈良時代の背子の変化したものとも言われている。袖のない丈の短い上衣で襟と袖口に別の布で縁取りのある背子が平安初期に変化し、藤原時代の唐衣となったと言われる。「なぞ唐衣は短衣といへかし。されど、それはもろこしの人の着るものなれば、」（枕草子137段 270）に有るようにその名のおこりは中国の人の着る物に擬したと見る説も古くからあった。しかし実際其の形は中国の背子とは違うもので幅の狭い一幅の広袖をつけた上衣で上半身丈である。後身頃は短く前身頃は袖丈と同じ長さ、襟を折り返して着る。「唐衣は 赤衣。葡萄染。萌黄。桜。すべて、薄色の類。」（枕草子 299段 446）とあるように、地質色目は身分により異なるが、禁色を許された人は錦、綾、唐綾などの織物、色は赤、青であった。又その他の人は絹を用い裏は綾絹を用いた。色は萌黄、紫、二藍、葡萄、蘇芳など随意であった。

一方、裳は古代腰から下に巻きつけた衣服の総称であった。「松浦河川の瀬早み紅の母の裾濡れて鮎か釣るらむ」（万葉集②81 大伴旅人861）などの例に見られる。又男子の礼服の皆具は礼冠、大袖、小袖、裳、単、表袴、大口、綬、玉佩、笏、襪、烏皮舄と「大宝律令」に制定されているように男子の礼服の一部になっていた。また僧侶の着る法衣にも宗派により多少異なるが裾とあり、襷のある裳が着用されていた。裳もその後平安時代から唐衣とともに女性の正装の一つとなった。腰から下の後方部を覆うものでやはり晴の装束には欠かせないものである。男子の束帯の裾に対抗して丈は長くなっていった。唐衣と一具をなすが、女房は出仕の間唐衣は脱ぐことがあっても裳を省くことはなく、裳だけで出仕する場合もあり、一種の礼装であった。腰に当たる部分を大腰と言い、大腰の左右には長く垂らす引腰、また前で括る前腰などの紐がある。地質は冬は綾、夏は薄物で地摺りで、「裳は 大海。しびら。」（枕草子 300段 446）とあるように大海の文様が広く用いられた。また一方、褶は略儀の際の裳の代用品であり上裳とも言う。「信

貴山縁起絵巻」中の女にその姿を見る事ができるが短く腰全体を覆うものであったらしい。

2. 裳着一着せられる姫君

平安時代より行われた貴族女子の通過儀礼で初笄とも言う。男子の元服である初冠、初元結に対する女子の成人式で大体十二歳から十四歳頃に行われた。初めて裳を着ける儀式で裳の紐を結ぶ役を腰結と言ひ、尊属や人望のある人物が務めた。古来髪上げとともに行われたが、裳着に当たっては予め吉日を勧申することになっていたようだ。時刻は通常、戌や亥など夜中に行われた。因みに藤原道長三女威子の裳着は「尚侍着裳、時戌二点」（御堂関白記 長和元年十月廿日）に行われている。典侍が威子の髪を整えたあとに道長自身が腰結を務めている。女子の成人式裳着をすることにより結婚適齢期であること、入内の準備ができていることを世間に知らしめるものであり、裳を着せられる女たちは政治のコマとしての役割の一步を踏み出させられるのであった。父親道長の政権戦略の一つになっていたのである。因みに威子は後一条天皇の后となる。

『栄花物語』には一品宮禎子内親王の裳着が詳細につづられている。

四月には枇杷殿、一品宮の御裳着とて、春よりよろづにいそがせたまふ。殿の御前御物具どもえもいはずし調へさせたまふ。なべてならぬ御事どもを思ひいそがせたまふ。御裳の腰は大宮の結ひたてまつらせたまふべければ、この宮はさらにもいはず、かの大宮の女房の装束どもなど、三日がほどのことなればいみじき御いそぎどもなり。治安三年四月一日にぞ奉りければ、その日のつとめて、土御門殿に渡らせたまふ。御乳母などは、まめやかにおとなしくすべけれど、唐衣、裳の腰など、山を立て、水を流し、置口をし、螺鈿、蒔絵をし、筋をやり、玉を入れ、すべてえもいはずことどもをしたり。若き人々は、ましてもの狂ほしきまで心のままにしたり。

（栄花物語 ② 329）

治安三年四月一日に一品宮禎子内親王の裳着の儀式が執り行われた。腰結は太皇太后彰子が務め、土御門邸の西の対に裳着の盛儀の為の道具などが運び込まれた。禎子内親王は道長と倫子の女研子と三条天皇の女である。禎子内親王の盛儀がこれから行われようとしていた。一品宮の御

乳母たちもこの時とばかり唐衣、裳の腰などに、山の景色や川の流れの模様をつけたり、螺鈿や蒔絵を施し、金銀の筋を置いたり、玉をはめ込むといった、おおよそ言うに言われぬ意匠を凝らすのであった。

以下に当時の裳着の様子が更に語られる。腰結は伯母である彰子だが、東宮の母でもある。腰結の役に彰子が務めることは禎子内親王の東宮入内を予兆するものであり、また典侍により東宮と姫を並べると雛の一对になるであろうと啓されている。回りは周知のことであった。政治的に力を持つ彰子は自らの子東宮に入内する禎子に特別な関心を持って接している。髪上げの儀は典侍が勤めている。

今は白き御衣ども奉りかへて、御髪上げには弁の宰相の典侍参りたまふ。近江の三位ぞ参るべけれど、それはこの一品宮の御乳付けに召したりしかば御乳母の数に入りてさぶらひたまへれば、それはめづらしげなくて召さぬなりけり。典侍見たてまつるに、まことにうつくしうおはしませば、めでたう見たてまつる。大宮、東宮をこそきよらにおはしますと思しめしけるに、これはいとまかにうつくしう明暮わがものにて見たてまつらまほしう思されけり。典侍、「ただ今の御有様ながら東宮の上に並びきこえさせたまへらば、いかに雛遊びのやうにてをかしうおはします」と啓すれば、宮々笑はせたまふ。かくて御髪上げさせたまへる御火影、似るものなくめでたううつくしうおはします。御腰結はせたまひて、いとねぶたげなる御気色なれば、かくて御裳着せさせたまへれば、夜更けて、明日もとて、帰らせたまふ。また、この宮の、御送りにおはします。

(栄花物語 ② 336 337)

白い唐衣と裳を着け、髪上げを終えた十一歳の禎子内親王が火影に浮かび上がった。其の姿はまだ幼さの残る少女の姿である。深夜のため眠たそうな様子がかわいらしいと語られている。しかしそれは東宮妃として入内するための世間への公表であり、道長の権力を誇示するものであった。腰結の役を一家の頼みどころである、長女の彰子に務めさせたのもその戦略の一つである。東宮はこの時十五歳、四年後の万寿四年三月に禎子内親王は東宮に参内している。実は禎子内親王誕生当初、道長は研子が男子ではなく女子を産んだことに不快感を抱いていた。『栄花物語』では禎子内親王の誕生をつばみ花と記している。道長にとって東宮（敦成親王）の誕生を栄花の

初花と記したことにより禊子内親王をつばみ花と喩えたのであろう。しかし皇女として始めて三条天皇から御剣が贈られている。この禊子内親王は後朱雀天皇妃となり後三条天皇の母となるのであった。そして後三条天皇は藤原氏の専権を押さえて親政を行った天皇であった。そしてその第一皇子が院政を行った白河天皇となる。藤原氏の摂関政治から院政へと時代の大きな波を乗り越えて国母となったのである。後三条天皇は母親が藤原氏出身ではなかったために断行できた親政であった。摂関政治の頂点を築いた藤原道長の孫娘、つばみ花と喩えられた禊子内親王の子が親政へと政治の実権を奪還したのは皮肉なことである。着せられる姫君であったが国母となったその生涯は、子を通じて藤原氏摂関政治の転換期を生きた事になる。

この裳着の儀式には道長一家より様々の贈り物が届けられ儀式を盛り立てるのであった。そして贈られた祝いの品々や唐衣裳など女房達に下賜されるのであった。ここで唐衣裳は最上級の禄として機能している。いずれも政治的ショーの一面がある。

3. 源氏物語における裳着

『源氏物語』における裳着に関する記述は八例見出される。裳着が行われた年齢、場所、腰結役、又結婚相手、巻名など表記してみた。以下それぞれの状況等を物語中から探り、裳着の儀式が物語の中でどのように機能しているか見る。

	所	腰結役	結婚相手	巻
1、弘徽殿女御所生姫君二所	右大臣邸			花宴
2、紫の上 (14歳)	二条院	源氏か	源氏	葵
3、玉鬘 (23歳)	六条院	内大臣	冷泉帝尚侍出仕	行幸
4、明石の姫君 (11歳)	六条院	秋好中宮	東宮	梅枝
5、女三宮 (13、4歳)	朱雀院	太政大臣	(源氏)	若菜上
6、六の君 (21、2歳)	六条院		匂宮	早蕨
7、女二宮 (16歳)	藤壺		薫	宿木
8、紅梅大納言の姫君達 大君 中君 宮の御方	大納言邸		東宮	紅梅

3.1 弘徽殿女御所生姫君二所

「花宴」の巻、弘徽殿の女御所生の女一宮、女三宮、女御里邸である右大臣邸で裳着を行っている。両内親王は右大臣邸の寝殿に住むことが「花宴」で描かれている。その右大臣邸での藤の宴に源氏は招かれるが、意図してゆっくりと待たれるほどに邸に渡るのである。源氏の装束は「桜の唐の綺のお直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引きて」(① 434) というあざれたるおほぎみ姿であった。それは寝殿に住む皇女二人よりも華やかであり、群を抜いていた。内親王付きの女房達も源氏によって藤壺辺りとの違いを比較されている。裳着を済ませた皇女であるが、さし当たった結婚話は出でこない。当時内親王は独身で過ごすことが一般的であったが、右大臣邸に住む皇女たちには縁談はこれからも語られない。「葵」巻で女三宮が賀茂の斎院に決まるが、今後物語を引っ張る姫君達としては扱われていない。ただ賑やかに今風な御殿に住む姫君達として遠景的に登場している。反対勢力の姫君達の華やかさではあるが、源氏の美しさを逆反射させる役目として登場している。

3.2 紫の上

『源氏物語』での女主人公として大役を担う紫の上の裳着は「葵」巻で源氏によって執り行われた。その裳着に先立って源氏は紫の上を伴い葵祭り見物に出かける。出立前に源氏は紫の上の髪のを削ぎ整えるのである。暦博士もって問い合わせ吉日かどうか調べてさせている。髪を削ぐことは裳着の儀式的準備段階であり、作者はこれからの紫の上の成長を丁寧に描写していると言える。

「君の御髪は我削がむ」とて、「うたて、ところせうもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と削ぎわづらひたまふ。むげに後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とて、削ぎはてて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、あはれにかたじけなしと見たてまつる。

はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む 源氏

と聞こえたまへば、

千尋ともいかでか知らむさだめなく満ち干る潮ののどけからぬに 紫の上

と物に書きつけておはするさま、らうらうじきものから、若うをかしきを、めでたしと思す。

(② 22)

源氏自らが紫の上の髪を削ぎ祝いの言葉を述べる。少納言の乳母は源氏が紫の上を大切に扱っているのを目の当たりにして感謝の念を抱く。髪を削ぐ行為は女性としてデビューすることを表わす。紫の上は初めて公の祭りの場に源氏と同車して出かけるのであった。この髪削ぎの後二人は歌を詠み交わしているが、紫の上は幼いながらも女性としての気持ちを源氏に向けている。その後源氏は紫の上と新枕を交わすことになる。

忍びがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、人のけじめ見たてまつり分くべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬあしたあり。

(② 63)

紫の上にとっては突然の事に狼狽し源氏の仕打ちをひどく思うのであった。しかし源氏はそのような紫の上の様子を宥めながらも愛情を持って見守るのであった。源氏からの後朝の文も紫の上は見ることもなく塞ぎこんで過ぐすのであった。しかし源氏は惟光に結婚の儀式の一つである三日夜の餅を用意させ、初めて女房や乳母は源氏と紫の上が結婚したことを知るのであった。源氏と紫の上の結婚は当時としては全く異例な形をとっていたのである。当時の貴族は男性が女性の元に通う婿入り婚であった。源氏も元服後、左大臣の一人娘葵の上を副臥とし、その後は左大臣邸に通っていた。しかし葵の上が急逝し、後に左大臣邸を去ることになった。二条院で源氏を待つ紫の上を見てその成長ぶりに驚くのであった。源氏は紫の上への愛情がいよいよ募り、「今はじめ盗みもて来たらむ人の心地するもいとをかしくて、」(② 66)と強引に二条院に連れ出したことを思い出すのであった。源氏と紫の上の結婚はこのようにして源氏の配慮の中、源氏の手の内で行われた。そして裳着も源氏は自らの手で行うのであった。

この姫君を「今まで世人もその人とも知りきこえぬものげなきやうなり。父宮に知らせきこえてむ。」と思ほしなりて、御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに思しまうくる御用意など、いとあり難けれ

ど、女君はこよなう疎みきこえたまひて、「年ごろよろづに頼みきこえて、ま
つはしきこえけるこそあさましき心なりけれ」と、悔しうのみ思して、

(② 69)

突然の出来事に紫の上は混乱し源氏には前のように打ち解けず、ひたすら源氏を一途に頼っていた自分を浅ましく思い益々塞ぎこんで行った。しかし源氏は改めて紫の上の美質を見出し、当時の結婚の手続きである三日夜の餅を用意し、新枕が先になってしまったが、今は父宮に知らせ、裳着の儀は世間には広く知らせなかったが、源氏は並々ならぬ裳着の用意をし、行ったと述べられている。しかしそれがどのように実行されたのか細かな描写はない。そして源氏は「盗みもて来たらむ。」と紫の上との結婚を思うのであった。つまり当時の姫君達とは全く違う結婚の形態が描かれている事になる。裳着は夫である源氏によって執り行なわれたが、腰結の役は誰であったのか。父兵部卿宮とも書かれていない。世間では源氏が隠し据えた女性が裳着を行ったとの噂が流れたであろう。父宮もその後は紫の上と文を通わせるようになったということで、一応父娘の関わりは回復出来たようであるが、紫の上は父宮にはやはり頼る事は出来ない。本妻の北の方の継娘に対しての扱いが明白であったからである。この中途半端な裳着の描かれ方が後の紫の上の境遇に影響していく事は明白であるが、他の姫君達の裳着の描写と比較しながら見て行く。

3.3 玉鬘

玉鬘の姫君は亡き夕顔の忘れ形見として九州の大宰府で育った。土地の豪族に結婚を迫られ乳母共々必死の思いで上京し、実父内大臣に会う手立てを考えていた折、長谷寺詣で偶然源氏の元で女房として仕えている右近に出会う。右近は夕顔の不慮の死後、その忘れ形見を探して長谷寺の観音に願をかけていたのである。源氏に引き取られた玉鬘は六条院の若きヒロインとして物語を進めていく。今や紫の上を始め六条院の女性達も年齢を重ねていた。そういう中、若き貴公子達を惹きつける種として玉鬘は源氏の庇護の元いつか実父に会える事を願って過ごしていた。しかし源氏自身も養父とは言え若く華やかな玉鬘に惹かれて行くが、その感情と理性で玉鬘の処遇を考えた時、やはり紫の上への愛情を越えるものではないと思うのであった。そして時の冷泉帝の尚侍として宮仕えに出す事に決めるのであった。出仕するに当たって裳着を行いその折に実父の内大臣に会わせる事にし、その腰結の役を依頼するのであった。当初内大臣は其の頃夕霧の結婚問題で陰悪になっていた源氏からの話しを断るが、母親の大宮の仲介により引き受ける事になる。そして玉鬘が亡き夕顔の忘れ形見である実の娘と知らされるのであった。驚きつつ内大臣は

源氏の申し出に感謝するが、内心は源氏と玉鬘の仲を忖度するのであったが、しかし此処は源氏の言葉に従わざるを得なかった。

亥の刻にて、入れたてまつりたまふ。例の御設けをばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせたまうて、御肴まいゐらせたまふ。御殿油、例のかかる所よりは、すこし光見せて、をかしきほどにもてなしきこえたまへり。いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵はいとゆくりかなべければ、引き結びたまふほど、え忍びたまはぬ気色なり。

(③ 308)

内大臣はこうと知ったからには早く姫君に会いたく当日は早めに六条院に参上するのであった。儀式などは丁重になされ、又内大臣はこうまで立派に儀式を実施する源氏の気持ちを図りかねるのであった。ともかくも亥の刻にいよいよ内大臣は御簾の中に入り、腰結の役を果たすのであった。源氏の計らいで照明も少し明るく点し、父と娘が顔を合わせることができた。しかし源氏には恩義を感じつつもやはり今までこのように隠していた事に対して恨みの言葉が出てしまうのであった。

うらめしやおきつ玉もをかつくまで磯がくれけるあまのころよ 内大臣

とて、なほつつみもあへずしほたれたまふ。姫君は、いと恥づかしき御さまだものさし集ひ、つつましさに、え聞こえたまはねば、殿

よるべなみかかる渚にうち寄せて海人もたづねぬもくづとそ見し 源氏

(③ 309)

それに対して源氏が玉鬘に代わって返歌をするのであった。「よるべのない身でこのような所に身を寄せた姫君は海人も見向かない藻屑のようなもので、誰にも探し出されなかったのです。」それに対して実父内大臣も異議を唱えることは出来ず、源氏の政治的駆け引きのなかで行われた。

玉鬘の裳着はあまたの求婚者の期待を嫌が上にも盛り上げたが、結局この裳着は冷泉帝の尚侍として参内させることに対する世間への知らせであった。時に玉鬘23歳、当時として大分遅い裳着の儀であるが、玉鬘に裳を着せる意味はここにあった。後宮への出仕するためのデビューショーであり、内大臣家に対しての源氏の優位であった。この裳着の儀も極めて政治的であり、源氏のすべて計画したものであった。腰結は父内大臣が果たしたとは言え、玉鬘の裳着は源氏によって企画実演された政治的ショーであり、玉鬘は着せられる姫君であった。

3.4 明石の姫君

明石の姫君の裳着は「梅枝」冒頭から語られる。源氏は物語当初に娘一人が後の位に着くとの予言を受け、(② 275) 明石の姫君を后がねとして養育するのであった。母親の血筋が低いために紫の上にその養育を依頼し紫の上も実母と等しく愛情を持って育て上げるのであった。

御裳着のこと思しいそぐ御心おきて、世の常ならず。東宮も同じ二月に御かうぶりのことあるべければ、やがて御参りもうちつづくべきにや。

(③ 395)

明石の姫君の裳着は東宮の元服に合わせ、裳着の後東宮入内が当然のこととして語られている。源氏は娘明石の姫君の持参する品々、調度類などよりによって準備を重ねている。

かくて、西の殿に戌の刻に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髪上げの内侍なども、やがてこなたに参れり。上もこのついでに中宮に御対面あり。御方々の女房おしあわせたる、数しらず見えたり。子の刻に御裳奉る。

大殿油ほのかなれど、御けはひいとめでたし、と宮は見たてまつれたまふ。

(③ 405)

明石の姫君の裳着は六条院西南、秋好中宮の里邸の御殿で行われた。源氏は戌の刻にそちらに渡り、寝殿の西側にしつらいを整えるのであった。秋好中宮は亡き六条の御息所と前坊の女であったが、御息所亡き後、源氏の養女となり、その後見のもと冷泉帝の中宮として時めいていた。

その里邸で中宮の腰結のもと裳着の儀が行われることは、これ以上ないほどの政治的狙いがあった。源氏は秋好中宮に対して心を遣い丁重に依頼をしている。今回義母にあたる紫の上と秋好中宮と対面を果たすことになる。中宮の腰結は明石の姫君を権威付けるものであり、源氏と紫の上と中宮、三者の協力のもとに明石の姫君の裳着は他に追隨を許さない盛儀になったのである。そして当然元服を済ませた東宮に入内は決まっていたが、余りにも源氏の勢力が絶大であることに他家からの入内は遠慮されてしまう。源氏は後宮では僅かな美の優劣を競うのが本当だろうと述べ明石の姫君の入内を四月へ延期するのであった。此処にも実力者源氏の姿が見られる。裳着は他家とは比較にならぬほどの威力を発揮したことになる。源氏自身秋好中宮、紫の上、明石の姫君が居並ぶ姿に満足しているのであった。この物語では中宮は藤壺、秋好、後の明石中宮と三者が登場するが、何れも全て王統の血脈の中宮である。現実には道長の娘達が全て中宮を継承していたのとは全く違う。紫式部は物語の中で藤氏ではなく皇統の姫君達を中宮に据えた。是は当時の現実、藤原摂関家時代においては大変な政治批判になりかねない問題である。親政が程よく施かれていた延喜天曆を時代考証としていたとは言え、紫式部の大胆さを見るのである。裳着の場面にも三代続く王統の中宮冊立が予想されるのである。

3.5 女三宮

「藤裏葉」の巻、六条院への冷泉帝、朱雀院の行幸があり源氏一家の繁栄が語られ、物語は大団円となり巻は閉じる。変わって巻は「若菜上」、『源氏物語』第二部はその様相を大きく変換していくのである。朱雀院の現状が「若菜上」から語り始められる。

その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。そのほど御年一三四ばかりおはす。「今は、と背き棄て、山籠もりしなん後の世にたちとまりて、誰を頼む蔭にてものしたまはんとすらむ。」と、ただこの御ことをうしろめたく思し嘆く。

西山なる御寺造りはてて、移ろはせたまはんほどの御いそぎをせさせたまふにそへて、またこの宮の御裳着のことを思しいそがせたまふ。院の内にやむごとなく思す御宝物、御調度どもをばさらにもいはず、はかなき御遊び物まで、すこしゆゑあるかぎりをば、ただこの御方にと渡したてまつらせたまひて、その次々をなむ、他御子たちには、御処分どもありける。

(④ 12)

六条院行幸の後、朱雀院はいつも以上に病が重くなり、いよいよ出家の本意を遂げる決心をする。しかし現世へ引き戻す絆は女三の宮の処遇であった。ここで物語はその母女御について語る。すなわちかの藤壺の宮とは母違いの妹で、朱雀院が東宮時代に入内した女御であった。その母が更衣であった為さしたる後見もなく又朧月夜の君の威勢に蹴落とされて、心細い日々を送っていたが、世の中を恨むようにして亡くなってしまった。その忘れ形見の女三の宮を朱雀院は取り分け可愛がっていたが、出家に際し其の扱いに苦慮していた。いよいよ出家生活を送る寺を西山に建立し移る時になったが、其の前に女三の宮の装着を行いたいと考えていた。朱雀院愛用の数々の宝物や調度品などは全て女三の宮に譲り、その他の品々は他の御子に相続するという偏愛ぶりである。朱雀院は降嫁先を夕霧、柏木、蛭兵部卿宮などと考えるが、親の亡き後、一番気になるところは皇女が浮名を流して世間の笑いものになることである。つい親心を乳母に吐露してしまう。

しか思ひたどるによりなん。皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなる事も、めざましきおもひもおのづからうちまじるわざなめれと、かつは心苦しく思ひ乱るを、またさるべき人に立ち後れて、頼む蔭どもに別れぬる後、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて、世にゆるさるまじきほどの事をば、思ひ及ばぬものとならひたりけん、今の世には、すきずきしく乱りがはしき事も、類にふれて聞こゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく下れる際のすき者どもに名を立ち、あざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱づかしむるたぐひ多く聞こゆる。

(④ 26 27)

院は「うたてあはあはしきようにもあり」と皇女の結婚は好ましくなく、軽薄な感じがするという考えを持っている。結婚をした為に「悔しげなること」や「めざましき思ひ」も生じることもあり、姫君が結婚することには気の毒にも思うのであった。しかし一方父親や後見を失った娘が好色な男により浮名を流し親の面目を潰すような事も耳にする。昔は高貴な女性が親兄弟を失っても自分独りで生きていけるように世の中の人々の心が穏やかで、身分違いの女性に懸想するような人はいなかったと、天皇家の絶対的権力が行き届いていた時代とそれが崩れてしまった現藤

原時代の人達の意識の相違を作者は朱雀院に言わせている。朱雀院が女三の宮の処遇を思い切れないでいた折、源氏の元に降嫁させる事に決めた理由は東宮の一言であった。「しか思し立つことならば、かの六条院こそ親ざまに譲りきこえさせたまはめ」(④ 32 33)と、早速源氏に内意が伝えられたが、源氏は辞退するのであった。しかし女三の宮の母親がかの藤壺の宮の義妹であることから女三の宮も並々ならぬ容貌であろうと思ひ描くのであった。そのような源氏の好き心が下敷きになって、結果的には朱雀院の出家姿を目にし、断りきれなくなるのであった。朱雀院の病状悪化と出家の願いを前にして慌しく女三の宮の裳着は執り行われる。

年も暮れぬ。朱雀院には、御心地なほおこたるさまにもおはしませねば、よろづあわたたく思し立ちて、御裳着の事思しいそぐさま、来し方行く先あり難げなるまで、いつくしくののしる。御しつらひは柏殿の西面に、御帳、御几帳よりはじめて、ここの綾錦はまぜさせたまはず、唐土の後の飾りを思しやりて、うるはしくことごとしく、輝くばかり調べさせたまへり。御腰結には、太政大臣を、かねてより聞こえさせたまへりければ、ことごとしくおはする人にて、参りにくく思しけれど、院の御言を昔より背き申したまはねば、参りたまふ。

(④ 36)

病状が思わしくない朱雀院はついに女三の宮の裳着を行う。裳着の儀式の行われる柏殿の西面は唐風のしつらいで統一し格調高く行うのであった。唐土の後の飾りを模している。舶来の品々を用意し父親として精一杯の儀式を行うのである。後の飾りによって裳を着せられる姫君の声は聞こえない。腰結役は太政大臣が務める。本来は血族での尊者が適任である為、太政大臣は気が進まなかったであろう。この場合、血族である源氏が務めることが妥当であろう。しかし朱雀院は源氏に降嫁させるつもりでいたので源氏には腰結の役は頼めなかったのである。親王達、左右大臣、上達部などが揃い朱雀院最後の盛儀を見守るのであった。朱雀院鍾愛の皇女が誰の元に降嫁するのか、参列者のなかでは各々思うところがあった。そのきらびやかさはその皇女の権威付けと参列者の期待を盛り上げる効果があった。父親の愛情が頼りの女三の宮はこの時十三四歳であったが、乳母からも「姫宮は、あさましく、おぼつかなく心もとなくのみ見えさせたまふ」(④ 26)と言われるほど、心もとない姫君であった。幼さの残っている姫君だからこそ、父朱雀院は格式高く我が鍾愛の姫君を権威付けるために特別のしつらいをして、裳着を行うのであ

った。着せられる姫君の様子はまだ具体的には読者には明かされない。招待客はこれが朱雀院が現世で行う最後の儀式との感慨を抱いていた。そして病中に思い切って行った儀式が終わるや三日後に朱雀院は出家するのであった。娘に父親としての役目を果たした後の慌しい出家であった。そもそも朱雀院は病弱ではあったが、それに追い討ちをかけたのはこの巻の前の巻「藤裏葉」で源氏邸への行幸によるとの読みもできる。臣下である、六条院へ時の帝、冷泉帝、朱雀院が行幸し、源氏一家の繁栄を目の当たりにして朱雀院は何事にも源氏に及ばなかった自分を思い知らされたのではないか。そのような源氏に朱雀院は愛娘を降嫁させようとしているのである。やはり源氏しか娘を後見できる人物はいないとの結論は朱雀院にとっては自ら敗者と自覚すると同時に勝者に愛するものを依頼せずにいられない程差し迫った状況であったのである。

そして翌年源氏は四十歳になり、当時では老境に入ったことになる。しかし源氏は其の年齢とは似つかわしくなく依然として若さを誇っていたのである。

かくて二月の十余日に、朱雀院の姫君、六条院へ渡りたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜まゐりし西の放出に、御帳立てて、そなたの一二の対渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまふ。

(④ 55)

このように裳着を済ませた女三の宮は内親王として臣下である源氏の元に降嫁してくるのであった。出家姿の朱雀院に心を動かされた源氏はやむを得ず承引したとは言え、下心にはやはりかつての藤壺の宮ゆかりを得たいという願望があった。それに反して当初藤壺の宮のゆかりとして二条院に据えられた紫の上は自ら成長し、藤壺のゆかりの姫君としての存在からは脱却して、自身の自己を確立していた。同じようにゆかりによって手繰り寄せられ女三の宮は今後源氏にとっては藤壺の宮のゆかりにはなれず、また自己を確立する事も出来ずに柏木との密通事件に関与する事になる。父親の後見の元、華々しく裳を着せられた姫君は今後二度と裳を着けることはなかった。それに反して若き内親王の降嫁により立場の逆転した紫の上は、改めて自らと源氏との関わりを思うのであった。祖母を失い父親からも厚遇されず、言わば孤児のような存在であった紫の上は源氏には盗むようにして二条院に引き取られ、自身とは関係の無いところで源氏よりは藤壺の宮の形代として生かされていた。しかし成長する女性、紫の上は自身的美質と才覚で六条院の女主としての地位を築き、源氏一家を支えてきた。しかし今になり、源氏が自分より身分の高い皇女を娶る事により立場は逆転するのであった。しかし紫の上は自身の誇りにかけてこの状況

を打開して行く方を考え、実行するのであった。ちょうど明石の姫君が懷妊し六条院に里下がりをしていた。そのおり、紫の上は女三の宮に対面を申し出るのであった。対面する折は目下の者が目上の方へ参上するのが礼儀である。紫の上は両者に対面するにあたって、「宮よりも、明石の君はづかしげにてまじらむを思せば、御髪すまし、ひきつくろひておはする、類あらじと見えたり。」(④ 80) 紫の上は明石の姫君、女三の宮に対面するにあたって、念入りに洗髪をし身づくろいをしたのであった。そのような紫の上はこの上も無く素晴らしい御方と周りの者達は見るのであった。しかし紫の上の心中は宮に対してよりも、明石の姫君に付き添っている明石の君が自分をどのように思うかと気遣うのであった。明石の君は身分差の為に実の娘を紫の上に託したが、今は明石の姫君の身辺のお世話をしている。身分差を何よりも身に沁みて体験している明石の君に今度は紫の上がどのように思われるかと、身づくろいをする描写には繊細な紫の上が描かれる。ここでは地の文にも明石の君、と女房格の呼び名で語られ、敬語はつかない。具体的には描かれてはいないがこの場合、紫の上は裳を着け二人に対面をしたと思われる。養女と言っても明石の姫君は東宮の女御であり、女三の宮は内親王である。威儀を正して対面したことであろう。又明石の君は当然裳を着けて奉仕している。裳を着ける側と着けない側に分かれることによりこの四者の相関関係は露になるのである。紫の上は全体の融和と調和の為自らが謙り、その証として裳を着けたのであった。少女時代、純真に慕っていた源氏と突然新枕を交わしたことにより、順序が逆になったが裳着の儀式は夫である源氏によって行われた。そして父親との交流は再開したとはあるが、露顕などは行われず、夫の住む屋敷に据えられた結婚であった。全て源氏の愛情のみが頼りの心細い境遇であったが、聡明で成長する紫の上は源氏の正妻格としての自らの地位を確立していった。しかし四十歳の源氏に内親王が降嫁してくることにより紫の上は対の上と呼ばれ、正妻格から降りるのである。さかのぼれば源氏と紫の上の結婚の進めかたは当時のそれと比べるといかに異常であったか。その発端の異常さが三十二歳の紫の上に降りかかったのである。源氏によって着せられた裳は今自らを謙って、着ける裳となったのである。

女三の宮の幼稚さは直ぐに源氏に見ぬかれ、逆に紫の上の美質が源氏によって再認識されるのは皮肉である。このようにして女三の宮は表面上は源氏の正妻として整われているが、下って、柏木と密通し薫の誕生と言う悲劇に見舞われる。源氏の目を恐れ、女三の宮は父親に頼み急遽出家して尼となるのであった。

巻は下って「鈴虫」、開眼供養も終わり、源氏が女三の宮を訪れる場面、庭に放った虫が鳴き、秋の風情が漂う中、出家した女房が仏に花を奉る闍伽杯の音が聞こえ、鈴虫の鳴く声と和している。宮は仏の御前で、端近くで物思いにふけりつつ経文を唱えている。この場面は有名な国宝「源

氏物語鈴虫Ⅰ」(五島美術館蔵)である。画面は大きく斜めに分断され、右手に秋草の茂る庭が描かれ、その中央に尼削ぎにした若い尼が閼伽棚で杯の水音を立てている。そしてその左にはまた若い女性が顔をのぞかせている構図である。これらは物語中どの人物なのか諸説があるが、まず若い尼削ぎ姿の女性を女三の宮とし、御簾の後ろから顔を出す女性を若女房とする。しかし一方では尼削ぎ姿は若い女房尼であり、御簾から顔をのぞかせる女性が女三の宮と言う説もある。

(源氏物語鑑賞と基礎知識26 122) 五島美術館の解説もこの説を採る。中央の女性は髪が長く桂姿である。女三の宮は出家当初から余り髪の毛は切らずに置いたとの描写もあり、又この場面では女三の宮の心中が大きく描かれているという解釈によるものであった。

しかし平成十七年十一月、科学調査に基づく復元模写が全て完成した。開始から六年の歳月を費やし国宝「源氏物語絵巻」十九図が全て平安の色に蘇ったのである。それによると今まで肉眼では判読できなかった人物の装束模様や細かい草木まで復元され、当初の姿を見ることができるようになった。是により鈴虫Ⅰの絵の解釈も大きく変わった。中央の御簾越しに顔をのぞかせる女性には長い髪が描かれているのは再確認できたが、その裾辺りに見える模様はまさしく三重襷であった。この文様は裳の模様としては典型的な文様であり、その奥には引腰らしきものも描かれている。女三の宮、女房かと説は分かれていたが裳を着ける女性によって女三の宮でないことが明らかになった。では女三の宮は何処に描かれているのか、と言う問題になるが、筆者はここには女三の宮は描かれていないと判断する。画面の手前、斜めに切られた屋台の御簾越しに濃縹に三重襷の直衣が描かれている。恐らくは源氏であろう。源氏の衣装の一部を描き、主人公の女三の宮を描かず、若い尼姿の女房と現世姿の女房を対比させたのではないかと思う。この絵一面に漂う静寂さに虫の声、閼伽杯の水音、そして念誦の声など、音が効果的に描かれており、逆に描かれない女三の宮の心中を際立たせていると言える。現代の科学により絵巻を描いた絵師の源氏物語解釈の一端が裳の模様により知ることができた。やはり裳は女房装束の必携である。

3.6 六の君

六の君は夕霧と藤典侍との間の娘であるが、落葉宮の養女となり六条院で育てられた。夕霧もひとときこの六番目の娘には愛情を持ち匂宮を婿に迎えたいと思っているが、当の匂宮はいとこ同士の「ゆかしげなき仲らひなる中にも、大臣の事々しく、わずらはしくて、何事の紛れをも見咎められむがむつかしきと下にはのたまひて、すみひたまふ。」(⑤ 206)と、目下は気にかかる宇治の中君のことを思うのであった。夕霧は親心としてなんとか匂宮を六条院に婿として迎えたいと画策するが、当の匂宮に其の気が無く、夕霧の堅物な性格に敬遠をしている。薫の手引き

もあり、匂宮は中の君と結ばれる事になる。中の君にとっては不意の出来事であったが、大君は三日夜の餅を用意し、後朝の文を携えた使いにも精一杯の祿でもてなし、是が正規の結婚であるように計らうのであった。しかし帝寵の篤い匂宮が宇治まで通う事は難しく、また母后から諫められる。宇治に通えない事を悩む匂宮は中の君を京に迎えようとする。しかし時の権力者である夕霧の後見は親王匂宮にとってはなくてはならないものであった。母親明石中宮はいずれ次期東宮にもと思っていたのである。そのためにも外戚を築く事が必要であった。六の君は夕霧、匂宮にとっても政略的なものであった。

なべてに思す人の際は宮仕の筋にて、なかなか心やすげなり。さやうのなみなみには思されず、もし世の中移りて、帝后の思しおきつるままにもおはしまさば、人より高きさまにこそなさめなど、ただ今は、いとはなやかに心にかかりたまへるままに、もてなさむ方なく、苦しかりけり。

(⑤ 280)

夕霧が宮中でも匂宮の行状を恨めしく思って愚痴るのを憚って足が遠のいているのであった。匂宮としてはもし帝后の言うように自分が東宮の位に着く事があれば中の君をも高い位に処遇しようと思っていた。彼は中の君を女房格ではなく京へ移し据えようと思った。宇治へ通うのは物理的には困難とは言え、夫の元に据えられる立場は紫の上と同様である。形式的には男が三晩通い、三日夜の餅の儀式は行っているが、露顕は無い状況であった。そして宇治の二姉妹は裳着の記述さえないのであった。父八の宮が困窮生活を余儀無くしていたとは言え、この二人の姫君達を政略的に使おうと言う意思は全く見られず、むしろ宇治の地で果てるように諭していたのである。従って華々しい姫君達ではなく、結婚を前提とした裳着も行われなかったのであろう。中の君は二条院に据えられ、匂宮と六の君の婚儀を聞きながらも耐えて、その後男御子を得るのであった。周囲はいやおうなしに匂宮の妻の一人として中の君を認めていく事になる。中の君は現実的に物事を見、考えて自らを処していくことになる。一方の夕霧の六の君は盛大に裳着の儀が行われるのであった。

右の大臣は、六の君を宮に奉りたまはんことこの月にと、思しさだめたりけるに、かく思ひの外の人を、このほどより前に、と思し顔にかしづきすゑたまひて、離れおはすれば、いともものしげに思したり、と聞きたまふも、いとほし

ければ、御文は時々奉りたまふ。御裳着のこと、世に響きていそぎたまへるを、
延べたまはむも人はらへなるべければ、二十日あまりに着せたてまつりたまふ。

(⑤ 356)

夕霧はいよいよこの月に匂宮を婿にと決めていたにも拘わらず、中の君を二条院に迎え据えたことに不快感を漏らしていた。それを耳にした匂宮はそれでも六の君には文だけは時々届けるのであった。そして夕霧はそのために裳着を延期するのも世間体が悪いので、同じ月の二十日余りに断行するのであった。六の君の腰結はどのように行われたかの記述はない。しかしこの時六の君は二十一二歳、当時としては遅いほうである。そして引き続き「宿木」の巻、匂宮は六条院に婿として通うのであった。三日夜の餅の婚儀が盛大に六条院で催されるのであった。そしてその儀に参列したもの達にはそれぞれ身分に応じて女の装束が被かれるのであった。六の君の裳着と婚儀を描く事により、中の君の結婚が反対に炙り出しのように浮き上がってくるのである。親より裳を着けられる六の君は匂宮にとってはまんざらでもなく、それはそれとして匂宮の愛情を得ていくであろう。裳着は六の君の結婚を前提に行われた、権威ある家の姫としての処遇であった。しかし中の君には裳着も婚儀の祝いも描かれていない。中の君は一生裳を着けずに済む人生を送る事になるであろうか。今後中の君が裳を着ける機会はこれから中の君がどのような地位を獲得していくかにかかっている。例えば匂宮が語っているようにもし次期東宮になれば、帝、后に謁見することもあろう。その場合は当然五衣唐衣裳を着け威儀を正すことが求められる。その場合の裳は裳着の記載もなかった中の君にとって晴て公にデビューする場となるであろう。夕霧家の六の君が盛大な裳着を行い、当時の手続きを踏んだ結婚をしているだけに、両者は今後どのように優劣が着くのかは語られていない。中の君にとっての着裳は当にこれからなのである。自ら獲得し着る裳なのである。

3.7 女二の宮

今上帝の御世、「宿木」の巻冒頭、其の頃藤壺の女御と呼ばれたお方は故左大臣の娘で、帝がまだ東宮であった頃に入内した方だが、娘一人を大切に養育し、裳着の準備を急いでいるのであった。しかし明石中宮方には御子も多く、その威勢に押されて不本意な日々を過ごしていた。心の支えは唯一女二の宮を立派に成人させることであった。

十四になりたまひふ年、御裳着せたてまつりたまはんとて、春よりうちはじ

めて、他事なく思しいそぎて、何こともなべてならぬさまに、と思しまうく。
いにしへより伝はりたりける宝物ども、このをりにこそはと探し出でつつ、い
みじく営みたまふに、女御、夏ごろ、物の怪にわづらひたまひて、いとはかな
く亡せたまひぬ。言ふかひなく口惜しきことを内裏にも思し嘆く。

(⑤ 364)

裳着のことだけを楽しみに、故左大臣邸の宝物どもをこの時とばかりに用意して立派な儀式に
する事だけを生きがいにしていた母親の女御は、夏頃あっけなくこの世を去ってしまった。女二
の宮には母親の兄弟達で世の信望があるような後見もない。そのような孤立した娘を帝は不憫
に思うのであった。そこで嬪として白羽の矢を立てたのが薫であった。かつて帝の父朱雀院が女
三の宮の処遇を考えあぐねていた折、源氏に降嫁するように進言したのは東宮時代の今上帝であ
った。その後その薫が立派に成長し、母親の力になっていることなどから、女二の宮の降嫁先を
薫に決め、その内意を仄めかすのであった。母親の四十九日が過ぎると帝は女二の宮を宮中に呼
び対面するのであった。「黒き御衣にやつれておはするさま、いとどらうたげにあてなる気色ま
さりたまへり。心ざまもいとよくおとなびたまひて、母女御よりもいますこしづしやかに重りか
なるところはまさりたまへるを、」(⑤ 365) 喪服姿の女二の宮はひとしお愛らしく気品の高さ
がまさっている。気立ても一人前になって、母女御よりもいますこし物静かに落ち着いたところ
がある、と帝は見るのであった。そのような折、秋の時雨が静かに降る夕べ「今日の時雨はいつ
もよりとくにのどかな感じがするので」と、帝は碁盤を取り寄せ薫を相手に碁を打つのであった。
「よい賭物があるがとても軽々しく渡すわけには行かない。」と女二の宮のことを仄めかすので
あった。碁の勝負の結果、帝の負けとなった。

「まづ、今日は、この花一枝ゆるす。」とのたまはすれば、御答へ聞こえさせ
で、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり。

世のつねの垣根ににほふ花ならばこころのままに折りて見ましを 薫

と奏したまへる、用意あさからず見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな。 帝

とのたまはす。

かように、をりをりほめかさせたまふ御気色を人づてならず承りながら、
例の心の癖なれば急がしくしもおぼえず。

(⑤ 368)

基に負けた帝は今日のところは花を一枝許そうと言うのであった。薫は庭前の菊を一枝折り、用意ある態度で歌いかける。それに対して帝は母を失った宮であるが美しく育っていると返すのであった。このように帝が直接その意向を薫に伝えていながら、例のいつもの性格か急いでその話を進めようとはしないのであった。女二の宮という帝の秘蔵娘を得ることは薫には心浮き立つことではなかった。しかし一方、匂宮と六の君の露頭の宴席で、心中匂宮と自身を比べ帝の婿として囑望されている我が身をまんざらでもなく思うのであった。しかも薫は更に明石中宮腹の女一の宮を更に望むのであったが、これはあまりにもおおけなきことと地の文で批判されている。

一方この頃薫は匂宮によって二条院に迎えられた中の君に思いを掛けていたのである。そして年が改まり、女二の宮は母女御の一周忌を済ませ、喪服を脱ぐのであった。

女二の宮も御服はてぬれば、いとど何ごとにかは憚りたまはん。さも聞こえ出でば、と思しめしたる御気色など告げきこゆる人人もあるを、あまり知らず顔ならんもひがひがしうなめげなり、と思しおこして、ほめかしまゐらせたまふをりをりもあるに、はしたなきやうはなどてかはあらん。そのほどに思し定めたなり、と伝え聞く

(⑤ 372)

女二の宮の母親の喪も明け、薫からの申し出を帝も待ち望んでいる様子なので、薫も仄めかしながら承諾の意を伝える。すでに婚礼の日にも決められていると人の伝えで聞くと、さて薫には亡くなった大君のことが思い出されるのであった。その後似通っている人ならどんな身分の人でも会いたいものだ大君の形代を求めるのであった。

かつての女三の宮が後見もなく父親の出家に先立ち、源氏に降嫁してきた事と経緯は似ているが、朱雀院と今上帝では年齢も違うし降嫁先が源氏と薫ではやはり年齢に大きな差があるといえる。しかし朱雀院の娘が源氏に、そして朱雀院の子の今上帝の娘が源氏の子の薫に降嫁するのは当に親子二代の相関図を見せる。しかし朱雀院も今上帝も母の無い娘の処遇で考えあぐねる姿は

親子の代でも引き継がれるのであった。このようにしていよいよ女二の宮の裳着は執り行われる。

女二の宮の御裳着、ただこのころになりて、世の中響き営みののしる。よろづのこと、帝の御心のひとつなるやうに思しいそげば、御後見なきしもぞ、なかなかめでたげに見えける。女御のしおきたまへる事をばさるものにて、作物所、さるべき受領どのなど、とりどりに仕うまつることどもいと限りなし。やがて、そのほどに、参りそめたまふべきやうにありければ、男方も心づかひしたまふころなれど、例のことなれば、そなたさまには心も入らで、この御事のみにとほしく嘆かる。

(⑤ 458)

女二の宮の裳着の準備が賑々しく行われている。母女御の用意したものを始め、帝のお声がかかりで宮中の作物所から調達したしつらいの為の調度が用意され、又受領達が競って奉仕するのは数限りないほどである。式が済み次第そのあとで婿君として参上するようにとのことであったから、男君（薫）もその心積もりをすることであるが、例の性分なのでそちらには気が進まず中の君のことばかり心配しているのであった。

かくて、その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳着の事ありて、またの日なん、大將参りたまひける。夜の事は忍びたるさまなり。天の下響きていつくしう見えつる御かしづきに、ただ人の具したてまつりたまふぞ、なほあかず心苦しく見ゆる。

(⑤ 462)

このようにして、二月二十日余りの日に女二の宮の裳着の儀は行われた。場所は宮中の藤壺であろう。しつらいも宮中の役所から調度類を出し、又受領が競って奉仕したので立派な盛儀となった。しかし裳着についての詳しい記事はない。腰結の役は誰が務めたのか。帝自ら腰の紐を結んだかもしれない。またそれぞれの贈り物は中宮初め、大臣、皇族達からも届いたはずであるが記述はない。女二の宮は喪服の姿が賞賛されていたが、是よりその姿が特記されることはなくなる。薫は婿として宮中に通うのは気が重い為自邸の三条の宮に引き取る事を考える。それは自邸ならば毎晩通わなくても明らかにされずに済むであろうと言う思惑があった。帝は急いで裳着、

とそれに式を行ったが、女二の宮が三条邸に直ぐに移るのには少々不安があった。しかし薫の母女三の宮とは懇意な仲なので女二の宮の事を依頼するのであった。このようにして四月明日にも三条邸に渡ると言う日、藤壺で藤の宴を帝が主宰するのであった。此処で薫は帝の婿として申し分ない英姿をみせるのであった。女二の宮はその後薫の正妻として三条邸の寝殿で過ごす事になる。女二の宮の裳着には亡き母と父親である帝の親心が映し出されている。ここには政治ショー的要素はない。娘の盛儀を父親が亡き母に代わって執り行った様子が語られる。しかし薫にとっては今上帝の娘を娶ることは、世俗の人生を生きる場合の重要なコマなのであった。言わば人質を得たに等しいのである。

さて巻は下って「蜻蛉」、六条院での法華八講の折、薫は図らずも夏の薄物を着る女一の宮を垣間見てしまう。女二の宮に似ているのではと期待を抱いていたがその姿は比べるべくもないほど美しく気品高い姿であった。夏のことなので、白い薄物を着て髪をこちらになびかせている女一の宮の姿であった。憧れの女一の宮を偶然に目にした薫は驚き喜ぶのであった。そして自邸に戻ると早速同じような衣装を用意させ、薫自ら女二の宮にその薄物の衣装を着せるのであった。しかし、それは薫の落胆につながるものであった。女二の宮は黙って着るだけであった。ここでも薫は女二の宮に女一の宮の代役をさせるつもりであったが、それは叶わぬことと思い知るのであった。着せられる姫君女二の宮は裳着も父親の帝から着せられ、又薫からは着せ替え人形のように薄物の衣を着せられた。父と夫それぞれの思いは違うが、そこに女二の宮の意思は働いていない。登場当初の姫君の特性を持続し、描きとおすことはない。薫の周辺にはもはや大君、中の君、浮舟もない。彼の思考は中断したままで次の巻へと行くのであった。

3.8 紅梅大納言の姫君達

「紅梅」巻、按察使大納言として登場するのはかつての頭中將の次男であった。柏木の弟であり今は藤家の当主となっていた。娘が二人、大君、中の君が先妻との間におり、またかつての真木柱の君と再婚し、その間にも男子一人を儲けている。一方真木柱は先夫、螢兵部卿宮との間に一女を儲けており、目下大納言邸に同居している。宮の御方と呼ばれ、父の兵部卿宮からまた祖父式部卿宮からの財産等を相続しており、父親譲りの琵琶が得意で、腹違いの姉妹とも音楽等を通して親しく交流していると語られる。大納言邸に宮家の息女が同居する事は異様であるが、真木柱の如才無い性格で事も無く過ごしている。大納言は二人の娘と同様に宮の御方の結婚話にも協力する旨を真木柱に伝えているが、真木柱は宮の御方の結婚には積極的ではない。しかし三人とも大納言邸で裳着を済ませている。

君たち、同じほどに、すぐすぎ大人びたまひぬれば、御裳など着せたまつりたまふ。七間の寝殿広くおはきに造りて、南面に、大納言殿、大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませたまつりたまへり。

(⑤ 34)

それぞれ裳着を済ませ、姫君達の行く先を案ずる大納言と真木柱であったが、大君は東宮に入内した。大納言が大君を東宮入内させたのには政治的意図があったからだ。夕霧右大臣の大君がすでに東宮妃として入内し時めいていたが、大臣は「人にまさらんむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ」(⑤ 35) と、亡き太政大臣の意思を継ぎ、藤氏から立後の機を得たいとの願望である。また中の君を勾宮に迎えたいとの願望も政略の一手であった。そのためには姫君達が結婚適齢期であることを世間に華々しく公表したのである。一方宮の御方は真木柱が前夫蛭兵部卿宮との間に儲けた娘である。しかし母の真木柱は無理に結婚を考えてはいない。勾宮は中の君よりこの宮の御方に気持ちがあるが、宮の好色な性格と宇治に通っている事を噂で耳にした母親は勾宮に賛成できないのである。さて七間の寝殿を持つ豪邸に住む大納言家の娘達は華々しく裳着を行ったであろうが、この後にそれぞれの結婚話は続かない。着せられる姫君達の中で東宮妃になった大君は後にその使命を果たしたか、又中の君、宮の御方の結婚はどのようなになったか、この巻で収束しそれ以降は語られていない。

4. 女房装束としての唐衣裳一身に着ける女君達

4.1『紫式部日記』と『栄花物語』に見る当時の女房装束

唐衣裳は、宮中に出仕する女官の礼服であったが、広くは貴族の家に仕える女房の装束をも指す。唐衣、裳、表着、打衣、桂、単、打袴、襪、畳紙、檜扇からなる。出仕する女房は貴人の前に伺候する時は必ず季節を問わずに着用した。前述したように唐衣は省く事もあったが、裳は必ず着用した。女房装束は女装束とも呼ばれ、『花鳥余情』に「女装束は裳、唐衣、五ぎぬなどなり」とある。宮仕えでは女房達が競って自らの着衣に意匠を凝らしている。これらは宮廷の一種の文化であり、慣習となった。行事などの際女房達が御簾の元に居並び、袖口の重ねの色目を見せる打出は、男性が裾を高欄に掛けて居並ぶのと同様に、華麗な衣装の競演となったのである。又女房装束を几帳の帳に結び並べ、正装の女房が御簾越に居並ぶように見える場合もあり、非常

に装飾性の高い衣装でもあった。又牛車の下簾からも袖の褻などを出す事を出衣と言い、その車のことを出車という。出衣により中に居る女性の趣味や教養が知られる。祭りや行事に出かける際に華やかな彩りを添えた。このように当時の宮廷や貴族家に仕える女房達の装束は一種の文化を形成していた。『紫式部日記』寛弘五年十月一六日、土御門邸に一条天皇行幸の記述に当時の女房装束の最礼装が描かれている。九月十一日に誕生した一条天皇の第二男子敦成親王対面のための行幸である。道長邸は綺羅を尽くして天皇を迎えるのであった。その折天皇に近侍する内侍二人の装束に見ることができる。内侍の一人、左衛門の内侍は髪上げ姿で天皇の御剣を捧げ持ち、唐衣は禁色の青色、たて糸は萌黄、よこ糸は黄色で通常晴れ着として着用する色目、裳は紫または藍色をグラデーションに染めたもの、そして櫛色をだんだら染め糸目を浮かせて紋様を織り出した綾織物の裙帯、領布、表着は菊重で袖口や裾のふきかえしを五重にし、表着の下には紅の絹を着ていた。領布はストールのようなもので肩から裾にかけた飾り布。又裙帯は引腰とも言い、装飾的な紐である。天皇に近侍し、晴の行幸であるためいずれも第一正礼装の装束である。他方弁の内侍は御璽の入る御筥を持つ。紅の搔練、葡萄紫の桂、裳、唐衣は左衛門の内侍と同じである。領布は薄紫と白のだんだら染めである。まるで天女のようなであると述べられている。唐衣、裳のほかに領布、裙帯まで着用し盛儀を盛り立てているとともに天皇の権威付けと格式を示すものであった。女官のなかでは最高トップの内侍の装束である。

御帳の西おもてに御座をしつらひて、南の廂のひぬがしの間に、御椅子を立てたる、それより一間へだてて、ひぬがしにあらたるときはに、北南のつまに御簾をかけへだてて、女房のゐたる、南の柱もとより、すだれをすこしひきあげて、内侍二人出づ。その日の髪あげうるはしき姿、唐絵ををかしげにかきたるやうなり。左衛門の内侍、御佩刀とる。青いろの無紋の唐衣、裾濃の裳、領布、裙帯は浮線綾を櫛だんに染めたり。表着は菊の五重、搔練はくれなゐ、姿つき、もてなし、いささかはづれて見ゆるかたはらめ、はなやかにきよげなり。弁の内侍はしるしの御筥。くれなゐに葡萄染の織物の桂、裳、唐衣は、さきの同じごと。いとささやかにをかしげなる人の、つつましげにすこしつみたるぞ、心ぐるしう見えける。扇よりはじめた、好みましたりと見ゆ。領布は棟だん。夢のやうにもこよひのだつほど、よそほひ、むかし天降りけぬをとめごの姿も、かくやありけむとまでおぼゆ。

(紫式部日記 191)

御簾の中には中宮付きの女房達がこの日の盛儀に精一杯の意匠を凝らして控えていた。禁色を許された者は赤色や青色の唐衣に地摺の裳、表着は一樣に蘇芳色の織物である。打衣は濃いもの薄いものそれぞれ紅葉を重ねたようである。重ねた桂はくちなし襲、裏青の菊襲、三枚重ねを着ている。又綾織物を許されない者は唐衣には平絹の青色、あるいは蘇芳色などで重ねはみな五重でその重ねはみな綾織物である。大海の模様を摺った裳の水色は目にしみるようで裳の大腰の部分固紋を多く用いている。

御簾の中を見わたせば、色ゆるされたる人々は、例の青いろ、赤いろ、の唐衣に、地摺りの裳、表着は、おしわたして蘇芳の織物なり。ただ馬の中将ぞ葡萄染を着てはべりし。打物ども、例のくちなしの濃き薄き、紫苑色、うら青き菊を、もしは三重など、心々なり。綾ゆるされぬは、例のおとなおとなしきは、無紋の青いろ、もしは蘇芳など、みな五重にて、かさねどもはみな綾なり。大海の摺裳の、水の色はなやかに、あざあざとして、腰どもは固紋をぞおほくはしたる。桂は菊の三重五重にて、織物はせず。わかき人は、菊の五重の唐衣を心々にしたり。

(紫式部日記 192)

様々に女房達が華美を尽くして絢爛たる王朝文化を形成している。しかしこの贅を尽くして華美を競う女房達に批判的な貴族もいた。敦成親王五十日の祝いの十一月十一日、公卿達は酒に酔い、女房達に戯れているが、当時の右大将、藤原実資は女房達の衣装の袂や袖口を数えているのであった。当時の衣装が段々華美贅沢になる傾向を不快に思っていたのであろう。当時の道長の摂関時代で気骨のある人物として、又道長には批判的な人物として紫式部も彼には一目置いていた。国宝「紫式部日記絵巻」五島本第三段の絵には公卿達が酔いに紛れて女房に戯れている場面、多分この公卿は右大臣藤原顕光であろう。そして右後方女房の袂を数えているのは藤原実資と思われる。彼はこの時五十二歳であった。後年『栄花物語』にも登場する。

万寿二年(1025)正月二十五日、皇太后研子の大饗が行われた。前夜から当日にかけて例によって女房達は支度に余念がない。当日は御簾を掛け渡して女房達が居並んだ。その出衣は壮観であった。

この御簾際を誰も誰も御覧じわたせば、この女房のなりどもは、柳、桜、山吹、紅梅、萌黄の五色をとりかはしつつ、一人に三色づつを着せたまへるなりけり。一人は一色を五つ、三色着たるは十五づつ、あるは六つづつ七つづつ、ただ着たるは十八、二十にてぞありける。この色々を着かはしつつ並みみたるなりけり。あるは唐綾を着たるもあり。あるは織物、固文、浮文など、色々にしたがひつつぞ着ためる。表着は五重などにしたり。あるは柳などの一重は皆打ちたるもあめり。唐衣どもの色皆またこの同じ色どもをとりかはしつつ着たり。裳は皆大海なり。

(栄花物語 ② 450)

この御簾際を誰も見渡すと、この女房達の衣装は柳、桜、山吹、紅梅、萌黄の五つの色目をとりにかわして、一人あて三色づつを着させた。一人は一色を五枚、それゆえ三色着た者は十五枚づつ、或いは一色を六枚づつ七枚づつ、したがって着ている桂の数は十八枚、二十枚になるのであった。表着は五重にしている者もいるが、裳は皆大海模様である。この絢爛豪華さに参列した公卿達は目を見交わして呆然としていたのである。そこで前述の藤原実資が、道長の息、頼通に女房の華美を評するのである。「いさ、今日の女房のなりのやうなることこそまだ見はべらね。ただ懸かる事はあさましうけしからずぞありける。」(栄花物語 ② 452) 実資はこの時六十九歳、右大臣、右大将、東宮傳を兼任しており、実際の年齢よりも若く見え、顔は情味をたたえ他の誰よりも親しみやすく見えるとこの物語でも好意的に書かれている。その実資に女房の行き過ぎた華美を批判された頼通は研子に苦言を呈するのであった。「大宮、中宮は、女房のなり六つに過ぐさせたまはねばいとよし。この御前なん、いとうたておはします。」(栄花物語 ② 456) 大宮や中宮は女房の服装を六枚以上はお許しにならないからまことに結構だ。この御前は実に困りものであると、研子に苦言を呈し帰るのであった。当座の女房達は身がすくんで動けなくなり、退出する者は車を陣屋の所まで引いてこさせ、又局に戻る者は茫然としてしまうのであった。それから結局頼通は父道長に閼白としての技量を叱責されるのであった。宮廷内での装束が華美になり自らを着飾った女房達の困惑ぶりが窺えるが、宮廷や権門で活躍する女房達が自らの才覚で衣装を凝らし、こことばかりに自己表現をすることには当時の働く女性としての認識もあり興味深い。着せられるという行為は受動的だが自ら着飾り、着る行為は自我意識を持ち、宮廷や権門で才能を開かせた女房文化を創ったのとも言える。

4.2『源氏物語』における女房装束の事象

『源氏物語』の中で裳の着用例中、女房装束として自らが着用する場合と自分の本意とは関係なく他の要因により裳を着せられる女君達について述べる。『源氏物語』に登場する女房は裳を着けることによりそれぞれの趣味、教養などを醸し出すしている。作者はその登場人物にふさわしいそれぞれの唐衣、裳を用意している。一方自らの意思とは関係ない力によって裳を着せられた女君達も登場する。着裳を描く事によりその身分のブレを思考する。以下にその例を見る。

4.2.1 自ら着ける裳

六条御息所の女房、中将の君

廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色のをりあひたる、羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見返りたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据えたまへり。

(① 222)

霧の深い朝、源氏は六条御息所邸から帰る場面、御息所の中将の君という女房が源氏を送りに出る。中将の君は紫苑色の季節に合った薄絹の裳を結びつけている腰つきがしなやかで優美である。隅の間の高欄に手を掛けて座らせた。この場面は女房として奉仕する時に着ける裳であるが、流石、御息所の女房だけに趣味も良いし振る舞いも優雅である。ちょうどこの頃登場する夕顔の女房達と比較されるのであった。またこの後の源氏と中将の君の贈答歌で朝顔が歌いこまれるが、それも夕顔との対比になっている。尚この中将の君は源氏の召人かとも言われる。

源典侍

この内侍常よりもきよげに、様体頭つきなまめきて、装束ありさま、いとはなやかに好ましげに見ゆるを、さも旧りがたうもと、心づきなく見たまふものから、いかが思ふらんと、さすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならずゑがきたるを、

(① 409)

桐壺帝の典侍はたいそう年かきであるが、人柄の並々ではなく才気があり上品で人々の信望も厚いのであるが、ただひどく好色であった。それを源氏は当時の重い気持ちを紛らすかのように興味半分で誘ってみるのである。丁度帝の調髪を済ませたところであった。源氏は好奇心から見捨てがたく、その典侍の裳の裾を引っ張ってみるのであった。いかにも軽薄で滑稽な場面での裳の役割である。宮中で奉仕する女官の正装である裳が男の手により引かれ、手繰り寄せられる小道具になっている。

玉鬘の下仕え

対の御方よりも、童べなど物見に渡り来て、廊の戸口に御簾青やかに懸けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童下仕えなどさまよふ。菖蒲襲の相、二藍の羅の汗衫着たる童べぞ、西の対のなめる。好ましく馴れたるかぎり四人、下仕は棟の裾濃の裳、撫子の若草の色したる唐衣、今日の装ひどもなり。

(③ 198)

六条院の馬場の競射の折、花散里の女童たち競射を見物にやってきた。菖蒲襲の相を着て、二藍の薄絹の汗衫を着ている。女童の正装である。又下仕は棟の裾が濃い裳を着け薄萌黄色の唐衣を着け、何れも正装である。五月五日の爽やかな季節にふさわしい装束姿である。六条院に参集する若公達と相和して晴れやかな絵のような場面である。

一条の宮の女房達

人々も、あざやかならぬ色の山吹、搔練、濃き衣、青鈍などを着かへさせ、薄色の裳、青朽葉などをとかく紛らはして、御台まゐる。

(④ 467)

喪中の一条邸、落葉の宮と強引に結婚した夕霧は喪中とは言え新婚にふさわしい装束に女房達を着替えさせるのであった。喪服から山吹襲、搔練襲、濃い紫、青鈍色など、紫の薄い色の裳に青朽葉色などのとりどりに目立たぬように着替えて、食事を差し上げるように女房達に指示をし

たのは大和守であった。彼は名実ともに男主人になった夕霧に対して、女房の装束からしつらいまで采配を振り追従したのであった。悲しみの一条邸に新しい主人ができる事は、女房その他の家司にとっても好ましいことであった。裳を着替えさせられた女房達は、落葉の宮の悲しみは分らない世俗に住んでいると言える。

中将の君

中将の君の東表にうたた寝したるを、歩みおはして見たまへば、いとささやかにをかしきさまして起き上がりたり。頬つきはなやかに、にほいたる顔をもて隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、いとをかしげなり。紅の黄ばみたる気添ひたる袴、萱草色の単衣、いと濃き鈍色に黒きなど、うるはしからず重なりて、裳唐衣も脱ぎすべしたりけるを、とかくひき懸けなどするに、葵をかたはらに置きたりけるをとりたまひて、

(④ 524)

「御法」の巻で紫の上が亡くなり、「幻」の巻では源氏は紫の上を偲んで一年を過ごす。季節は葵祭りの頃、中将の君が転寝をしているところを源氏が通りかかる。小柄でかわいい様子していたが、是に気付きそっと起き上がった顔が上気してはなやかである。紅の黄ばんだ袴に萱草色の単を着て、濃い鈍色の桂に黒い表着が少し崩れて重なっている。中将の君は紫の上を偲んで非常に濃い色の喪服を着用していたのである。裳や唐衣もそっと脱ぎ落としてあったが、それをさりげなく引きかけているその姿が源氏にとっては見過ごしがたいひと時であった。宮仕えの女房が自分の局でほっとしてまどろむ姿であるが、正装である唐衣を肩からすべり脱ぎ、裳もはずしてゆっくりくつろぐ姿である。女房達にとって唐衣裳を着ることは身が引き締まる行為でもあると言える。「おはしませねば、裳も着けず、桂姿にてゐたるこそ、物ぞこなひにくちをしけれ。」

(枕草子 87段 177) 主人の中宮が不在の折には女房達は唐衣裳を着けずにくつろいでる。清少納言はそれがなんだか折角の雰囲気に興ざめなことになっていると記している。しかるべく主人に正装の唐衣裳を着けて奉仕することは女房の誇りでもあった。

4.2.2 外因による着裳

浮舟

今日は乱れたる髪すこし梳らせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかし
く着かへてゐたまへり。侍従も、あやしき褶着たりしを、あざやぎたれば、そ
の裳をとりたまひて、君に着せたまひて、御手水まゐらせたまふ。姫宮にこれ
を奉りたらば、いみじきものにしたまひてむかし、いとやむごとなき際の人多
かれど、かばかりのさましたるは難くや、と見たまふ。

(⑥ 1474)

匂宮と浮舟は宇治の隠れ家で二日間過ごす。その朝匂宮は女房の侍従が着ていた裳を浮舟に着
けさせて洗面の介添えをさせるのであった。以前、匂宮は浮舟に先に洗面をするように勧めた事
もあったが、今はもう浮舟の素性も大体知ることとなったのであろう。認知されないとは言え、
浮舟の父は宮家の出身である。しかし現在の匂宮にとって浮舟は所詮女房クラスの女としての認
識しかないのだ。自分の姉宮の女一の宮に女房として差し出したらきつと大事にするであろうと、
思っているのである。召人の一人としての感慨である。母中将の君が大事に育てた浮舟ではあっ
たが、都の貴顕には女房クラスの扱いをされるのであった。裳を着けさせる浮舟の感慨は此处に
は特に描かれていない。まだ自己の認識を持たずに裳を着けさせられた女君であった。

宮の君

姫宮の御具にて、いとこよなから御ほどの人なれば、やむごとなく心ことに
てさぶらひたまふ。限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けた
まふぞ、いとあはれなりける。

(⑥ 252)

故光源氏や八の宮とは兄弟である式部卿宮が亡くなった。残された姫君は継母からは嫌われ、
継母の兄に縁付けようとされている。亡き父宮が大変大切に育てた姫君であった。かつては薫を
婿として迎えることや又東宮への入内も考えられていた。しかし父宮の亡くなった後、明石中宮

は気の毒に思い、女一の宮の相手にと六条院へ引き取ったのである。格式のある宮家の姫君でも父兄弟などの後見を失うと心細い運命をたどる事になる。女房として出仕したからには宮の君と呼ばれ、裳を着けて交じらうことになる。誠に痛々しいことであった。薫は西の対に局をもっている宮の君を尋ねるが、取次ぎの古女房がありきたりの応対をするので薫は取り次ぎなしに宮の君と話できるように、話すのであった。それに対して宮の君は直接薫に声をきかせるのであった。薫は宮仕えに出た結果もう軽々しく声を聞かせるようになってしまった宮の君の立場を不憫に思うのであった。式部卿宮家と言う権門の子女でも没落し、世の浪にこれから晒されていくのであろうか。明石中宮の下とは言え、運命が宮の君に裳を着けさせたのであった。王統の子女が世に取り残され、人目に晒され彷徨う事はかつての朱雀院も八の宮も皆同様の悩みを持っていたのである。宮の君は当にその事例として登場していると言える。

5. 自己認識としての着裳

晴の装束五衣唐衣裳は宮廷女性の礼装である。それは最高の威儀を正すことであり又自らの存在を知らしめるものであるが、礼装を纏う事は成人女性として世に認められることでもある。と同時に自らの謙りを意思表示するための女房装束でもあった。女房装束を纏う場合も外因により自らの意思に関係なく着せられた女君達もいた。今度は女房ではなく貴顕ではあるが、自らの意思と配慮で裳を着ける例を見る。それは当時の宮廷社会においての身分の格差から来るその場その場の立場の揺れを素早く悟り、実行する行動力でもあった。秩序を保つための配慮は他からの要因でおこなうのではなく、自らの判断で行う才覚であった。

女房ある限り、裳、唐衣、御匣殿まで着たまへり。殿のうへは、裳の上に小桂をぞ着たまへる。「絵にかきたるやうなる御さまどもを。いまいらへ今日とは申したまふぞ。三、四の君、宮の御裳ぬがせたまへ。この主には御前こそおはしませ。」

(枕草子 256段 410)

正暦五年（994）二月十日、関白藤原道隆が法興院の積善寺で一切經の供養をした折、そこには東三条女院子、中宮定子などが列席していた。女房達は晴の装束である唐衣裳を着けていた。

又女房格ではない御匣殿まで裳を着け威儀を正していた折、道隆の室、すなわち定子の母の貴子は裳の上に小桂を着ていた。それを見た道隆は「絵にかいたように素晴らしい皆さんの姿ですね。三、四の君よ、中宮様の御裳を御脱がせなさい。この場の主は中宮様でいらっしゃるのだから。」と言った。貴子は自分の娘と言えど中宮である定子の前では唐衣を着なければならない。しかし小桂姿であった。貴子は才学の誉れ高く高階氏出身、高内侍と呼ばれていたが、この場では夫道隆に注意されているのである。

殿のうへいだきうつしたまひて、ゐざりいでさせたまへる火影の御さま、けはひことにめでたし。赤いろの唐の御衣、地摺の御裳、うるはしくさうぞぎたまへるも、かたじけなくもあはれに見ゆ。大宮は葡萄染の五重の御衣、蘇芳の小桂たてまつれり。

(紫式部日記 200)

一方こちらは道長の長女彰子の所生敦成親王の生後五十日の祝いの描写である。彰子の母倫子は若宮を乳母から受け取り抱きかかえて、膝行する様子である。赤色の唐衣に地刷りの裳を着けている。一方彰子は葡萄染襲の五重の桂に蘇芳の小桂を着ている。若宮と中宮に敬意を表し倫子は正装で臨んでいるのである。中宮彰子は桂姿である。紫式部はこの母娘の態度が格別立派であると述べている。娘といえども中宮の方が身分が高いから母である倫子は唐衣裳を着けて奉仕しているのである。それを弁えている倫子の態度を紫式部は「かたじけなくあはれに見ゆ。」と賞賛している。前述の道隆が妻の貴子に注意した場面と対象的である。

弁える才覚、判断力は身分制度の世界にあっては必須のことであった。しかし、親子や兄弟、場面などによりその身分が上下することがある。宮廷社会においてその判断を間違える事は後々までの恥辱となるのであった。貴子の場合は才学がありながら、最後が惨めであったと語られる事になるのである。尚正装は身分の上の者ほど崩して良いとされた。したがって彰子の態度もこの場合順当である。男性の正装は束帯であるが、身分の高い者は布袴を用いる場合もあった。

このように身分の高い者程緩やかになり、身分の低い者は高い者への威儀を正し正装を用いた。前述「花宴」での源氏が右大臣邸の藤の宴に招かれて渡る部分、桜の唐の綺の直衣に葡萄染めの下襲、裾を長く引いて登場するが、他の者達が束帯で参列する中、これも源氏だから許された装束なのであった。

かかる御あたりに、明石は気おさるべきを、いとさしもあらず。もてなしなど気色ばみ恥づかしく、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長、萌黄にやあらぬ、小桂着て、羅の裳のはかなげなるひきかけて、ことさら卑下したれど、けはひ、思ひなしも心にくく侮らはしからず。高麗の青地の錦の端さしたる褥に、まほにもゐで、琵琶をうち置きて、ただけしきばかり弾きかけて、たをやかにつかひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、またあり難くなつかしくて、五月まつ花橘、花も実も具して押し折れるかをりおぼゆ。

(④184 185)

六条院女樂の場面、女三の宮、明石の姫君、紫の上などの中で明石の君は圧倒されるはずであるのに、そうでもない。振る舞いが上品で心深さが感じられるのであった。柳襲の織物の細長に萌黄色らしい小桂を着て、目立たないように薄物の裳を着けて殊更卑下しているが、その様子は侮れない。又高麗の生地で縁取りのしてある褥には遠慮して膝だけのせ、琵琶をそっと前に置いて、得意げには弾かない。しなやかに使いこなした撥さばきは世にも好ましいものであった。それは丁度五月待つ花橘の花も実もある美しさであった。明石の君はその出自の為いつも自身を卑下して、過ごしてきたがその人柄は品格があり、他の高貴な女君にひけを取らなかった。しかし女樂のように源氏の妻子が集う場では自ら裳を着け、他の女性達より謙った態度を示すのであった。又高麗生地の褥には遠慮して膝のみのせて座る振る舞いも奥ゆかしさを表わしているのである。このように自らの身分を判断しそれに即した衣装、物腰などは当時の貴婦人の間ではその人の教養、人格を判断する材料となったのである。

6. おわりに

平安時代、宮廷での女性の正装、唐衣裳を着ける場合のひとつは権門の子女の成人式であり、それは政権戦略のコマであり、結婚を控えて世に出るデビューショであった。それらの姫君達は尊属もしくは人望のある人物、腰結の役により裳を着せられるのであった。父母と腰結の役との三者でなされる政治ショーであった。姫君達は家の期待を担って裳を着せられたのである。

一方女房の装束でもある唐衣裳にはその身分に応じて色や糸目が決められていた。しかし働く

女性の女房達はそのような制約の中でも自己を表現するため、競って衣装に細工をしたのである。自ら着る裳は宮廷で働く女房達の誇りでもあった。螺鈿、蒔絵、縫い取り、地摺りなどの数々の意匠を凝らしている。又、本来は裳を着けずに済むような姫君も家の没落により、権門家に出仕し不本意な裳を着ける事もあった。生きるために権門の女性の女房となった姫君の着ける裳は哀れである。又、男性より戯れに裳を着けさせられる女君も気の毒である。自己認識とは別に世間での認識が裳を着けさせたことになる。

また、貴顕の前に侍する時はたとえ身内でも謙って裳を着ける行為は賛美された。中宮定子の母貴子と中宮彰子の母倫子との場面は対照的であった。物語では明石の君の謙った身のこなし態度が賞賛されている。では紫の上はどうであったろうか。前述したが、紫の上は当時とは異様な結婚形態を取った。先に結婚があり次に裳着が行われている。そしてその後露顕の描写はない。そのような源氏と紫の上の結婚は当時の結婚形態から大きく外れるものであった。世間的には認められない形態であった。しかしその後紫の上はその人柄と美質で正妻格になり、世間も認めることになった。しかし晩年の源氏に女三の宮が降嫁することにより、紫の上ははっきりと立場を自覚するのであった。女主人公、紫の上の描かれなかった裳着の儀は後年の状況まで波及するのであった。源氏により着せられた裳を後に紫の上は決意とともに自ら着ることになる。それは今や六条院の女主となり寝殿に住む女三の宮に対面する折である。この際当然紫の上は正装で女三の宮に対面したと思われる。この紫の上の裳を着ける行為は、自身の誇りにかけて自ら行った行為であった。六条院の安定の為に必死になって行ったのである。このように藤原時代の宮廷社会では衣装の一つである裳を着けることには様々な女性の様々な表象があった。

参考文献

- 阿部秋生他校注 『日本古典文学全集源氏物語』 小学館. 1995年
柳井滋他校注 『新日本古典文学体系源氏物語』 岩波書店. 1993年
池田亀鑑編 『源氏物語事典』 東京堂出版. 1988年
藤岡忠美他校注 『日本古典文学全集紫式部日記』 小学館. 2007年
鈴木一雄他監修 『源氏物語の鑑賞と基礎知識』 至文堂. 1998年
松尾聰他校注 『日本古典文学全集枕草子』 小学館. 1995年
山中裕他校注 『新編日本古典文学全集榮花物語』 小学館. 2008年
山中裕他編 『平安時代の信仰と生活』 至文堂. 1994年
秋山虔他編 『源氏物語図典』 小学館. 1997年

- 小野教孝著 『新国語図録』 共文社. 1996年
- 京都国立博物館編 『宮廷の装束』 京都国立博物館. 1999年
- 徳川美術館他監修 『よみがえる源氏物語絵巻』 ニューカラー写真印刷株式会社. 2006年
- 五島邦治監修 『源氏物語六条院の生活』 青幻舎 1999年
- 切畑健編 『日本の女性風俗史』 京都書院. 1997年
- 長崎盛輝著 『かさねの色目』 京都書院. 1996年
- 並木誠士監修 『日本の伝統紋様』 東京美術. 2006年